まふべし、

〔小右記〕永觀三年○寛和元年正月廿八日癸酉、左大將遣取湯漬於麗景殿羞公卿、傳聞、去夜大納言又有此事、弘徽殿歟、連夜湯漬如何々々、

長元元年十一月廿三日癸丑、東大寺重進愁文、以詮義傳進不相逢、兩度愁文事、未被定之間、頻進愁文不可然、今日陣定計也、深更欲湯漬事、前日仰左大史貞行宿禰、而大外記賴隆幷貞行等、依觸穢不可參大臣手長、以大外記令奉仕、大夫史奉仕之例未覺、何況不可參哉、仍可止湯漬儲由、仰左大史親○佐親了、

〔空穗物語國讓下〕まかなひせんや、ゆづけせよなどのたまへば、○略中かねのつきにしてゆづけして、あはせいときよげにて、とのにまいる、

〔源氏物語二十一乙女〕大殿もかやうの御あそびに心とゞめ給て、いそがしき御まつりごとどもをば、のがれ給なりけり、○略中御かはらけまいり給に、くらうなれば、おほとなぶら參り、御ゆづけ、くだ物などたれも〳〵きこしめす、

〔枕草子十二〕心づきなきもの

いみじうゑひなどして、わりなく夜ふけてとまりたりとも、さらにゆづけだにくはせじ、心もなかりけりとてこずばさてなん、○略下

〔榮花物語二十四若枝〕やう〳〵日さしいづれば、わざとならずおかしきさまにて、くびものども里よりもてきてくふもあり、それにめをみやらずあふぎをつらぬき、たきものをおくもあり、つぼねのひと〴〵、あないみじや、げあげさせ給なこの日ごろ、物さはがしうおぼしめして、物もきこしめさず、けさだになほ御ゆづけにてもたゞすこしきこしめせ、さてそこらの御ぞどもはいかゞもたげさせたまはんずる、御覽せずやはありし、